

児童教育を支援する「博報財団」が、すぐれた取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

国際文化理解教育部門

東京都特定非営利活動法人 みんなのおうち

コミュニティの再生を目的に設立された法人

新宿区に暮らす外国人は、4万3690人（平成30年11月1日現在）と都内で最も多く、区民の12%を超えている。さらに日本国籍者も含めて、使用言語や習慣など多様な文化背景も考慮すると、外国籍者の割合から見ると以上に複雑な多文化社会がそこに存在していると予想できる。この地域で、2005年から、外国ルーツの子どもたちや家族の支援を軸に、多岐にわたる活動をしているのが、特定非営利活動法人 みんなのおうちだ。

新宿区の都市コミュニティの再生を図ることが、立ち上げ当時の趣旨でした。そう語るのは、同法人代表理事の小林普子さん。自身も新宿区で子どもを育てた経験をもつ小林さんは、都市コミュニティが成り立ちにくくなっている新宿区で子育てをしていく苦労を、身をもって体験していた。さらに小林さんの耳には、外国からやってきた母親が日本語が理解できないために、子どもに予防接種を受けさせられないといった外国ルーツの家族が抱える問題が続々と飛び込んできた。

校でいじめにあっているという相談も寄せられるようになってきました。私自身、新宿区に外国ルーツの子どもたちがこれほど多いこと、さらに新宿区に住む外国ルーツの家庭が抱えている問題がこんなに深刻化しているとは、自覚していませんでした」（小林さん）

そして2007年、同法人は新宿区との協働により「外国ルーツの子どもへの日本語と学習教室」を開設。現在まで同法人の活動の中心として

続くこの教室は、小学4年生以上クラス（週2回）と中学生クラス（週3回）に分けて開催されている。子どもたちを1対1でサポートするのは、高校生から78歳までのボランティアだ。

悩みを打ち明け大人との信頼を育む子どもたち

「通っている子どもの中には、ひとり親家庭や複雑な家族関係、また虐待やいじめの問題を抱えている子どもも少なくありません。最初はあまり話さなかった子どもが学習の合間に少しずつボランティアに悩みを打ち明けてくれることもあります。DV被害などの早急な対応を必要とする場合は、関係機関に通報し、全面的なサポートもします」（小林さん）

親戚や知人などにいる日本の子どもに比べて、外国ルーツの子どもたちは、親と学校の先生以外、大人と接する機会が少ない子どもも多い。そんな子どもたちにとって、1対1で学習をサポートし、自分を待っている大人がいる教

室は、安心をもちたらず大切な居場所となっている。

「急速に学力や偏差値が上がった子どもは少ないのですが、教室での経験が彼らの下支えになっているとは思います。ゆっくりですが着実に成果をあげています。教室を卒業し、高校に進学した子どもたちは135人。ほとんど中退者を出していないのが、その証ではないでしょうか」（小林さん）

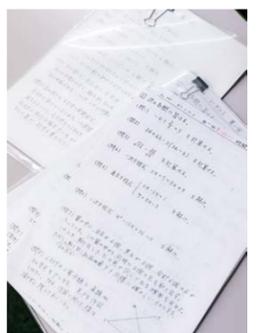
公立高校で外国籍の子ども、もしくは外国につながる子どもなどで日本語が十分でない生徒の中退率は、公立学校に通っている日本人の7倍にのぼるといふ報告もある。そうした厳しい現実にあっ

て、当法人の活動は大きな成果をあげているといえるだろう。さらに小林さんは、他団体と共同で2017年8月から「居場所みんなのおうち」も開設。子どもたちや教室の卒業生が学習したり、食事をとったり、相談したりできる自由なスペースの提供も始め

た。親が夜間に働いている家庭も多く、温かい食事を仲間たちと囲みながら、ふと「家族みたいだね」と漏らす子どももいるという。

「教室を立ち上げた当初に通っていた子どもたちが社会に出る年齢になった今、直面しているのは彼らの就労問題です。査証の種類の問題で正規雇用が困難な場合や、親が非正規労働者のため、正規で働くメリットを理解しない子どもたちもいます。だからこそ、これからはキャリア教育にも力を入れたい。幼い頃から日本で育ち、日本の学校を卒業した彼らのなかにはバイリンガルの子もいます。社会の戦力になるはずですから」（小林さん）

みんなのおうちの活動は、そこに集う子どもたちの未来を太陽のように明るく照らし続けている。



中学生クラスでは高校受験対策もしっかりとケアする。



火・木・土曜の19時～21時に開かれている学習教室の中学生クラス。学生や主婦、会社員、退職者などがボランティアとして学習をサポートする。

外国ルーツの子どもたちに1対1で寄り添い、ともに学び合う学習支援や居場所づくりの活動

多くの外国人住民が暮らす新宿区で、15年におよび外国ルーツの子どもたちの諸問題に取り組んできた特定非営利活動法人 みんなのおうちに博報賞が贈られた。



平田康郎さんはリタイア後、ボランティアとして参加。「子どもの成長とともに私も学ばせてもらっている」と語る。



2018年3月にはハンバーガーショップSHAKE SHACKの協力で中学校3年生が職場体験もした。



来年度はぜひキャリア教育に取り組みたいと熱心に語る代表理事・小林普子さん。

推薦者 お祝いのことば

東京学芸大学 齋藤ひろみ教授

「子どもの状況も支援方法も一人ひとり違う。学校ではどうすればいい？」、みんなのおうちの活動に参加した私の学生の、素直な感想です。そして、「驚くことも多いけど、子どもたちに揺さぶられて一緒に変わっていくのが楽しい」という皆さんのことばに、教師を目指すかれらは奮い立たせられたようでした。この子どもの未来に対する温もりのあるまなざし、そして、社会・教育問題への鋭い視線と行動が、この度、高い評価を得られたのですね。おめでとうございます。この受賞で、皆さん方の哲学と活動の波がさらに広がっていくことを心より期待しております。